友人及び親の行動が大学生の規範と環境配慮行動に及ぼす影響

環境計画研究室　伊藤響

1. 背景と目的

ごみのポイ捨て問題など環境問題の改善・解決には，環境に優しい行動（以下，環境配慮行動）の促進が重要であることは明白である．環境配慮行動の規定因を解明できれば，効率的に環境配慮行動の促進を行うことが可能である．

環境配慮行動の規定因に関して，子供は，親の行動が主観的規範の認知を媒介して，環境配慮行動に影響を及ぼし，親は個人的規範が自身の環境配慮行動に影響を及ぼすことがわかっている（安藤ら　2009）．子供にとっての身近な存在が親であるのでこのような結果が得られているが，身近な存在が親から友人へと変わる大学生は，親の行動による主観的規範の認知が薄れ，友人の行動が主観的規範の認知を媒介して環境配慮行動に与える影響が強いのではないか．

本研究では，まず仮説モデルを構築し，仮説を基にアンケートの作成・実施を行う．そして構造方程式モデリングを用いて，アンケートデータとモデルの当てはまりをみた上で，大学生の環境配慮行動の規定因の考察を行う．

2. 研究方法

2. 1 仮説モデルの構築

大学生は親の行動よりも友人の行動が自身の環境配慮行動に強く影響しているのではないかという仮説をもとに，計画的行動理論（Ajzen　1991）と先行研究（安藤ら　2009，広瀬　1994）を参考として，大学生の環境配慮行動の実行意図を規定すると考えられる仮説モデルを構築した．

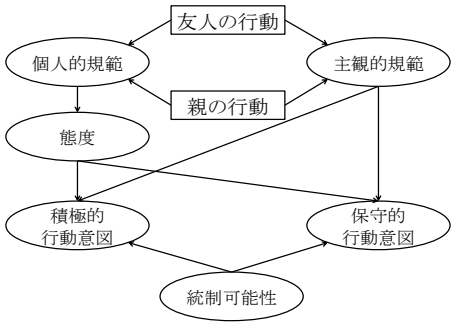

図 1　仮説モデル

2. 2 アンケート調査

平成 25 年 12 月 19 日～平成 26 年 1 月 14 日に鳥取大学の学生 246 名を調査対象としアンケート票を配布した（有効回答率 90.2%）．調査項目は以下の通りである．

【環境配慮行動の行動意図】保守的環境配慮行動と，積極的環境配慮行動の 2 つに分類し，それぞれ 2 項目で尋ねた．

【友人・親の行動】回答者から見た，友人・親の環境配慮行動の実行度を尋ねた．

【ポイ捨て行動に対する態度】ポイ捨て行動に対する評価ないし感情を計 3 項目で尋ねた．

【統制可能性】環境配慮行動を実行するにあたっての難易度を計 3 項目で尋ねた．

【個人的規範】環境配慮行動に対する倫理的義務感を計 3 項目で尋ねた．

【主観的規範】環境配慮行動に関して，友人・親からの期待度の主観的判断をそれぞれ 3 項目で尋ねた．

3. 結果と考察

コンピュータソフトウェア R を用いた分析の結果，仮説モデルの適合度指標は GFI, AGFI, CFI, RMSEA のすべてで適合度が悪かったため，モデルの構築を見直す必要があった．その理由としては，モデルのパスが多かったことが考えられた．

表 1　仮説モデルの適合度

GFI	AGFI	CFI	RMSEA
0.716	0.625	0.760	0.108

モデルの構築を見直した再構築モデルの分析の結果，友人の行動からの全てのパスは有意とならなかった．このことから友人の行動が大学生の環境配慮行動を規定する要因とはいえないことが考えられる．

再構築モデルでは，積極的環境配慮行動を促進する第一要因は主観的規範（親からの期待）であった（p=0.003）．親の行動が，主観的規範の認知を媒介して，積極的環境配慮行動に影響を及ぼすことが示唆される．また，親の行動から積極的環境配慮行動の行動意図への直接的なパスも確認された（p=0.006）．

保守的環境配慮行動の行動意図を促進する第一要因はポイ捨て行動に対する態度であった（p=0.008）．したがって，ポイ捨て行動に対し，否定的な評価ないし感情を持つ人ほど，ポイ捨てをせず環境配慮的な行動をとろうとするということである．

表 2　再構築モデルの適合度

GFI	AGFI	CFI	RMSEA
0.835	0.756	0.913	0.078

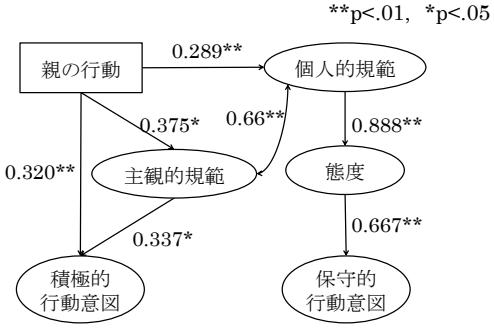

図 2　再構築モデル

4. まとめ

分析の結果，仮説は支持されなかった．本研究では，友人の行動からの有意なパスが認められなかったことから，友人の行動よりも親の行動の方が大学生の環境配慮行動の行動意図に影響を及ぼすことが示された．